

美術の窓(133)

若冲と同じ技法を使った掛軸

大和文華館館長 浅野秀剛

前回の「美術の窓」で、千社札について書かれた最も古い文献である『題名功德演説』について述べた。それは、今、東京の三井記念美術館で開催されている「春信一番!写楽二番!フィラデルフィア美術館浮世絵名品展」に出品されている『千社札貼込帖』に因んで取り上げたのであるが、今回のテーマもそれに関連したものである。その展覧会は、10月10日(土)からあべのハルカス美術館でも開催されるので、どうかご容赦願いたい。

フィラデルフィア美術館には、4点の正面版筆彩掛物絵が所蔵されている。正面版とは、石碑の拓本をとるのと同じ技法を、石ではなく板を用いて制作したものである。石碑の代わりに板に彫刻したものの正面に、湿らせた紙を貼り付け、彫った部分に十分紙を入れ込み、タンポに墨を付けて紙の上から叩く(筆や刷毛を使うこともあった)。そうすると、彫っていない表にだけ墨が付く。近年用いられている「拓版」あるいは「拓版画」と同じであるが、「拓版」「拓版画」が、戦後に相見香雨氏が用い始めた言葉であるのに対し、「正面版」は、宝暦期(1751~64)の『書籍目録』に用いられていることが中野三敏氏によって指摘されている。伊藤若冲の制作した『乗興舟』などの3種の「拓版画」は折からの若冲ブームでもあり、多くの人がご存知であろう。技法としてはそれと同じなので、「若冲と同じ技法を使った掛軸」という題にしたが、これも便乗商法である。

思えば、相見氏が初めて「拓版画」なる言葉を使ったのは、『大和文華』16号(1955年6月)に掲載された「新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問変相経について(下)」である。そこではわず

同年9月の『芸術新潮』第6巻第9号に「若冲の拓版画」と題した小論を掲載し、一般に普及したという歴史がある。

正面版筆彩掛物絵とは、主要部分を正面版で仕上げた後、筆彩を施して掛軸に仕立てたものをいうが、それを指す言葉を見出すことができなかったのが、昨年の国際浮世絵学会春季大会の研究発表の折、私が命名したものである。正面版筆彩掛物絵は、日本では大和文華館に2点あるのが知られているくらいで、そのうえ、豊かな画趣を湛えた作品とはいいい難いからことさらにほとんど誰にも研究されずにきた。昨年の初め、中野氏が収集された作品が2点、九州大学附属図書館に所蔵されていることを知り、調査させていたのだが、それが私の把握している国内にある正面版筆彩掛物絵の全部である。

図1は、展覧会に出品されているフィラデルフィア美術館蔵の「鴨を襲う鷹」である。白黒の挿図で恐縮であるが、正面版の部分は、上部から中央にかけての濃墨、下方左の水の青、下方右の土手の薄青(灰青?)と思われる。青と薄青は、タンポを用いたようだが、濃墨部分は、刷毛のようなものを用いてべったり着色しているように見える。つまり、板に紙を貼って、三色で加彩していることになる。それ以外の緑、茶、赤、薄赤、黄は、版から紙を剥がした後に筆彩したものと思われる。紙は一紙で、87.9×27.3cmなので、絵画の小縦軸とほぼ同じ大きさになる。

図2の大和文華館所蔵の「朝日松に鷹」の場合、正面版の部分は、背景を含む広い面積の青、下方左右の土手の薄青、鷹の墨である。鷹の墨はタンポで打ち出したと思われるが、他の部分は、刷毛、筆、タンポなど、何を用いて

出したか判然としない。それ以外の赤、緑、黄、紫は筆彩であり、朝日の赤い部分は、青を塗り残した部分に筆で描いている。紙はやはり一紙で、90.1×29.2cmである。

現在把握している、類似の正面版筆彩掛物絵は12種25点であり、大和文華館と九州大学のものであつて欧米に所蔵されている作品の一部に浮世絵師の磯田湖龍斎の落款があるので、制作に湖龍斎が関与しているのではという指摘は早くからあつたが、それ以上のことは不明であつた。私がこの特殊な掛物絵を調べてみようと思ったのは、たまたま国会図書館蔵の『天明絵暦』を通覧した時、そのなかに正面版筆彩の摺物「柳桃図」(図3)が貼り込まれていたのが契機といつてよい。その摺物は、正面版筆彩掛物絵の制作地と年代、そして制作に関与した人物に関して有力な手がかりを与えてくれた。

「柳桃図」は、17.1×12.6cmの大きさ、青色の正面版に緑・赤・茶の筆彩を施したもので、『唐詩選』の「春思」の七言二句や親

和の署名・印章も正面版で表わされている。その青色は正面版筆彩掛物絵の青色と同質のものと思われる。『天明絵暦』には86枚の摺物が貼付されていて、おそらくほとんどが江戸およびその周辺で制作されたものであり、天明3年の大小が71、天明4年の大小が12、本図を含め不明が3という内訳である。「柳桃図」は残念ながら年代不明の3図に属しているが、他の大小と同様、天明3~4年の春用に制作されたものであることはほとんど疑いない。三井親和が天明2年(1782)に亡くなっていることを考えると、その死を惜しむ人が、親和にゆかりの正面版を用いた摺物を制作したものと推察されるのである。親和は、日本における正面版の創始にかかわった細井広沢門人であることも重要である。

したがって、12種25点の掛物絵は、天明頃に江戸の湖龍斎、親和周辺で制作されたと考えて大過ないであろう。ただ、調べをすすめると、若冲の作品と12種の掛物絵の周辺には色々な正面版作品が存在し、それらが絡まって正面版文化というようなものが形成されていたらしいことが分かってきたが、この欄でその全部を記すことは到底できない。興味のある方は、是非展覧会にお出かけくださり、できれば図録を購入していただきたいと願っている。

図1



図2



図3



季刊 美のたより No.191

平成27年 7月3日

発行 大和文華館